

軍事史学

第47卷 第3号

巻頭言

「慰霊」と「顕彰」という両義性

戦没者に対して国や公共団体、あるいは民間で行われる表敬・追憶・哀悼などさまざまな思いが込められた、今日「戦没者追悼」と総称される営為——軍事史の中でもとりわけ精神的な要素に富む魅力ある領域でありながら、これまで靖国神社や護国神社、忠霊碑・忠霊塔などをめぐる政教訴訟や首相や閣僚による靖国神社参拝への近隣諸国の反発といったすぐれて時務的な文脈で語られることが多かったこのテーマに対して、近年は若手研究者を中心にさまざまな切り口からアプローチされた実証的な論究が積み重ねられてきたことはまことに喜ばしい。

そのキーワードである「慰霊」が死者の「靈魂を慰めること」であり、「顕彰」が死者の「功績を世間に知らせ、表象することであること」は、どの国語辞典を引いても共通しているが、「慰霊」に宗教的な意味を認知する一方で、「顕彰」には逆に世俗性を感得し、また、死者を「偲び、悼み悲しむこと」を内容とする「追悼」をその中間に置くという腑分けは概ね了解できるとしても、これらの概念をめぐって、なお論者の間で見解の相違が解消されているわけではないことも事実である。

「慰霊」をさらに宗教的儀礼と絡ませれば、「招魂」「鎮魂」ないし「供養」という境域に達するが、「慰霊」それ自体は価値的にはあくまでもニュートラルであるのに対し、「顕彰」には価値的にプラスに評価するという側面があることは間違いない。宗教性の有無・濃淡だけで両者を対照させることには躊躇せざるを得ない。

戦後日本では、宗教的色彩を感じさせる「慰霊」は政教分離への配慮からか、それ以上に「顕彰」は過去の戦争への美化に通じるという危惧からか、国や地方公共団体レベルでは周到にこれを避け、「全国戦没者追悼式」に典型的に見られるような「追悼」という無難だが、いささか曖昧なニュアンスを持つ語が採用されることが多かった。

しかし、災害や事故に遭遇して死亡したのではなく、戦争という国家の非常時に際会してかけがえのない生命を捧げた戦没者に対する生者からの営みは、「慰霊」という次元にとどまらず、個々の戦争への評価を離れて、国家・公共への献身に対する「表敬と感謝」の意を込めた「顕彰」が大本になくてはなるまい。欧米諸国のそれが単なる mourning はもとより memorial, remembrance だけでなく、honor も加わった二重の基調音から合成されていることを想起すれば……。